



表1 10a 換算収量及び果実品質

試験区	年次 (定植後年数)	仕					立			
		結果母枝2芽短梢剪定					長梢剪定			
		'88 (2年)	'89 (3年)	'90 (4年)	'91 (5年)	'92 (6年)	'93 (7年)	'94 (8年)	'95 (9年)	'96 (10年)
1987年 植栽樹	収量 (kg/10a)	496	603	442	516	1,079	812	362	992	1,443
	房重 (g)	371	361	300	246	490	351	225	382	451
	粒重 (g)	12.4	13.5	16.3	14.2	13.7	16.9	11.7	10.4	11.5
	糖度 (Brix)	14.0	16.8	17.1	16.4	18.2	17.0	16.8	17.2	17.6
	酸度 (%)	1.65	0.55	0.57	0.52	0.58	0.57	0.54	0.83	0.73
	(定植後年数)					(2年)	(3年)	(4年)	(5年)	(6年)
1991年 植栽樹	収量 (kg/10a)					409	409	515	1,092	1,539
	房重 (g)					371	279	232	354	469
	粒重 (g)					11.9	15.0	11.2	12.3	11.4
	糖度 (Brix)					17.4	18.2	17.8	18.3	18.4
	酸度 (%)					0.66	0.58	-	0.73	0.71

3 試験結果及び考察

(1) 短梢剪定で行った1994年までは、花芽を形成しない新梢や花振りの発生が多く、安定収量が得られなかった。これは、短梢剪定で基部1~2芽を利用したことが原因と考えられた(表1)。

(2) 長梢剪定に改善した1995年からは、1,000~1,500kg/10aの収量となった。本県の棚仕立て‘紅伊豆’の標準収量は1,200kg/10aであることから、本仕立て法では、比較的安定した収量が得られると推察された(表1)。

(3) 粒重及び糖度は、各年とも十分であったが、酸度は長梢剪定とした1995年から若干高い傾向が認められ、収穫時期等について検討が必要と思われた(表1)。

(4) 2m以下の新梢率からみると、供試樹の平均新梢長は2m前後と推察され、適正な樹勢であると思われた。しかし、本仕立て法は長梢棚を用いた長梢剪定法と比べ強樹勢となりやすいため、発芽から開花期までの新梢の伸長状態を良く観察し、芽欠き時期と量を適切に判断する必要がある。また、樹勢が著しく強くなると予想される場合は、

表2 樹体生育

試験区	年次	項目 幹周 (cm)	2m以下の新梢率 (%)
1987年植栽樹	'96 (10年目)	29.2	64.8
1991年植栽樹	'95 (5年目)	16.3	49.8
	'96 (6年目)	17.2	45.1

注. 2m以上の新梢は生育期に摘心

剪定時に犠牲枝を残し、開花後剪除するなど、適樹勢に近づける必要があると思われた(表2)。

(5) 埋設したラブリットは多くの根が貫通しており、根域制限効果は低かったと考えられた(表3, 図4)。

(6) 本仕立て法は管理作業の大半を胸の高さで行うことが出来るため、軽労化が図れると思われた(図1, 3)。

4 まとめ

‘紅伊豆’の垣根仕立て法は、長梢の結果母枝とし、芽欠

表3 根系分布

区	掘り上げ位置			太さ別根重 (生重g/掘り上げ面積1,000cm <sup>2</sup> )			
	地表から の深さ (cm)	幹から の距離 (cm)	ラブリット の内外	2mm以下	2~5mm	5~10mm	10mm以上
A	0~50	0~50	内	22.0	29.6	42.1	62.8
B	"	50~75	内	25.3	22.7	13.6	23.7
C	"	75~100	内	14.8	8.7	9.5	33.3
C'	"	75~100	外	14.8	19.0	9.4	0.0
D	"	100~125	内	33.8	12.6	4.6	31.4
D'	"	100~125	外	8.4	5.3	13.6	0.0
E	"	125~150	内	19.7	16.8	11.5	76.8
E'	"	125~150	外	9.7	10.4	10.8	5.4
F	"	150~175	内	21.1	18.6	1.4	37.6
F'	"	150~175	外	6.6	12.2	7.9	0.0
G	"	175~200	内	23.5	22.3	0.0	35.4
G'	"	175~200	外	4.2	16.7	45.7	78.0

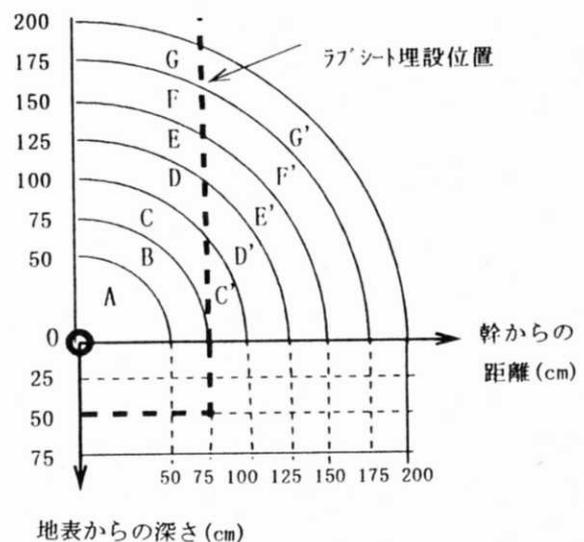


図4 掘り上げ位置

きの樹勢のコントロールや、樹冠拡大に伴う間伐により、安定収量が得られることが明らかとなった。また、間伐を前提とすれば、根域制限の必要はないと考えられた。